奨学生レポート

多田野奨学生　2025 年度(令和 7 年)第 1 号
金地健登（東京大学 1 年）

地方から東大に来て感じたこと

去年の春に東京大学に入学し、1 年が経とうとしています。この 1 年間、地方出身の学生として、大学生活を送る中で感じたことや、入学するまで知らなかったことを書きたいと思います。

私は小・中・高と、地方の公立学校で過ごしてきました。塾には通わず、学校の授業と独学を中心に勉強し、東京大学文科一類に現役合格することができました。大学では運動会弓術部（弓道部）に入り、今は弓道に打ち込む毎日を過ごしています。

まず述べたいのは、地方と都会の情報の差についてです。実際には東大には都市圏出身の学生が多く、地方出身者は決して多数派ではありません。しかし、受験勉強そのものにおいてはそれほど大きな違いはないように思います。勉強する内容は全国共通であり、地方にいても取り組むこと自体は可能だからです。私が最も格差を感じたのは、受験そのものよりもむしろ東大合格後でした。

東大には高校のようにクラスがあるのですが、ある時クラスメイトがこんなことを言っていました。「あの子、小学生の時からサピで一緒なんよね。」ここでいう『サピ』とは、関東で広く知られている中学受験専門塾『SAPIX』のことです。小学生の時から同じ校舎の人が東大の同じクラスにいるという状況は私には想像もしていなかったことでした。

情報格差は確かに存在します。東京出身で東大合格者が多い高校や塾の人たちは、先輩や先生から東大について色々と話を聞くことが出来るようです。例えば、合格後に何を準備すれば良いのか、第二外国語は何を選べば良いのか、進振りに有利なのはどの科類なのか、その他様々な行事への取り組み方といった情報です。私の場合、こうしたことの多くを、合格後や入学後になって初めて知りました。東大には幼少期から東大を目指す環境の中で来たような人がたくさんいるということ、そして彼らとの間に少なからぬ情報格差が存在しているということを実感しました。

また、こうした背景とも関係していると思いますが、東大には比較的恵まれた家庭環境で育った人が多いようにも感じます。部の同期には永田町住みの大学教授の娘がいたり、上級生にはとある財閥の出身の方がいたりします。もちろんそれらは極端な例ですが、東京の私立中学・高校出身の人や長く塾に通っていたような人が大多数です。このような環境の違いから、教育機会の格差について考えることもあります。

しかしながら、東大にはそういった人ばかりいる訳ではありません。私のように、地方の公立高校出身の人も一定数います。ある授業で、石川の公立高校出身で塾に通わずに東大に

現役合格したという学生に出会いました。そのことを聞いた時、私は強い親近感を覚えました。また、私の部の同期には同じく地方出身の人も多く、方言の違いや地元の文化の違いなどで話が弾むことも多々あります。一方で、東京の私立中学・高校出身の人や、海外で暮らしていた経験を持つ人などもいます。そうした人たちと日々一緒に授業を受けたり、ともに弓を引いたりする中で、自分の知らなかった考え方や世界に触れることが多くあります。

私が今回の奨学生レポートで伝えたかったのは、東大は地方出身者にとって厳しい場所ではなく、むしろ、多様性に溢れた過ごしやすい場所であるということです。地方出身者だからと変な目で見られることはなく、特に何も言われずに普通に扱われるか、逆に、よく地方から東大にきたねと驚嘆のまなざしを向けられることの方が多い印象です。私は自分自身が地方出身であることに誇りを持っています。確かに、都会と地方とでは、情報や背景の違いは存在しますが、東大の中においてはそれらが障壁になることは決してなく、むしろ自分の視野が広がり成長出来る場になっています。このレポートが、地方から大学進学を目指す後輩たちへの励ましになればうれしく思います。